

会議録（要旨）

件 名	令和４年度 第１回亀岡市総合教育会議		
日 時	令和４年６月２１日（火）		
	午後３時３０分～５時３０分	場 所	市役所８階 ８００会議室
出席委員	９人 桂川市長／石野副市長／神先教育長／北村教育長職務代理者／ 末永委員／出藏委員／福嶋委員／陀安委員／秋山委員		
欠席委員	なし		
事務局出席者	１７名 教育部長兼文化資料館館長事務取扱／教育部次長兼総括指導主事／教育総務課長／学校教育課長／社会教育課長兼社会教育係長事務取扱／社会教育課人権教育担当課長／歴史文化財課長兼文化財係長事務取扱兼文化資料館主幹事務取扱／学校給食センター所長／図書館長／みらい教育リサーチセンター所長兼まなびサポート係長事務取扱／教育総務課副課長兼総務係長事務取扱／ こども未来部長兼福祉事務所副所長／保育課長／保育課副課長兼保育幼稚園係長事務取扱／ 政策企画部長／企画調整課長／企画調整課企画経営係長		
傍聴者数	１名		

１ 開 会

２ 市長あいさつ

３ 協議事項「教育施策の重点事項」について

（１）地域に根ざした教育活動について（資料１－１、１－２）

教育長（説明要旨）

現在、育親中学校ブロックにおける学校規模適正化の取組を進めている。地元の市議会議員及び各町の自治会長、各小中学校の PTA 会長、各小中学校長で構

成する育親中学校ブロック協議会においては、畑野、青野、本梅の3小学校及び育親中学校を一体的に整備し、令和6年4月から義務教育学校として開校することを目指していくことが確認され、5月には各町、住民及び各小中学校、就学前の保護者を対象に計7回説明会を開催し、確認事項について説明をした。

また、6月20日には、今年度第2回目の育親中学校ブロック協議会を開催し、5月に実施した各町、住民及び保護者説明会に寄せられた主な意見として、「仮校舎の設置による学習環境を十分に整える必要があり、また義務教育学校としての開校スケジュールを検討する機会を設けることはできないか。」という御意見をいただく一方で、「これまでの経過の説明を聞いており、早期実現を待っている。また、新たな学校は改修ではなく、新築としてほしい。」と期待を寄せられていることを報告し、改めて、当初の提案通り新しい学校づくりを進めていく方向性が確認された。

さらに、育親中学校ブロックにおける義務教育学校の開校に向けて、調整すべき多数の事項を効果的かつ効率的に全ての町、PTA、学校が関わりを持ち、一体となった新しい学校づくりを進めることを目的に、新学校コンセプト検討グループ、教育・学習環境検討グループ、通学・施設検討グループの3つのグループ、総勢60名で構成する調整会議を立ち上げ、第1回目の会議を昨日のブロック協議会後に開催した。地域全体で新しい学校づくりに取り組んでいくという機運が高まった。過去の説明会においても保護者からは、新たな義務教育学校への期待が寄せられていることを受け、義務教育学校の魅力の一つとして、特色ある教育内容を検討する必要がある、その参考として、6月1日に、長野県の伊那小学校と高遠小学校を、教育委員3名と育親中学校ブロック協議会の構成員、市立幼稚園長、教育長ほか教育委員会事務局の職員を含め、32名で視察した。

伊那小学校では、「子どもは自ら求め、自ら決め出し、自ら動き出す」を目的とした「子ども観」を大切にし、子どもの求めに沿った体験型総合学習を展開されていた。

高遠小学校は、「地域の方々と共に地域の学習を進める子どもたち」という観点から、地域の方々が地元伝統の踊りを子どもに指導する様子を拝見した。

いずれの小学校においても、どのような子どもを育てたいかという理念を持ち、活動内容を工夫していることを実感した。

育親中学校ブロックにおける新たな義務教育学校づくりの特色においても地域と共に子どもたちを育て、子どもたちにとってよりよい環境を整え、より魅力あふれる学校づくりを目指し、保護者、地域住民、学校関係者、教育委員会が一体となって取り組んでいきたいと考えている。

今回の総合教育会議でいただいた御意見を、今後、各町の地域住民や調整会議において検討し、目指すべき学校像を含め、育親中学校ブロックに最も良いと考

えられる地域に根ざした義務教育学校づくり、また、コミュニティスクールの推進に活かしていきたいと考えている。

市長

教育委員会では、地元との協議等、話の場をつくっていただき、一定の方向性を出していただいた。

教育委員の皆さんから、西部地域における新たな学校づくりに対する御意見をいただきたい。

委員

地元や学校での説明会が滞りなく進んでいることは有難いことである。

地元と学校が一体となって、新たな学校づくりを進めようとする時に、視察研修に行かせていただいた。

高遠小学校では、地域の方に学校に入ってもらい、子どもたちに指導していただくことで、地域の方々の願いや歴史、文化について、子どもたちが生き生きと学んでいる姿に触れさせていただいた。これは西部地域においても、そういった財産があるので、やっていける部分だと思った。

伊那小学校では、歴史の重み、深さというものを感じさせるような取組で、総合的な学習の時間と位置付けられる時間を拝見したが、先生が前に立って指導するのではなく、子どもが自ら活動をしていた。一つ一つの子どもたちの行動が、自分たちで理由づけをされており、それに基づいて動いていけることはただならぬ積み重ねを感じた。

今後、西部地域で新たに学校をつくっていくときに、地域の良さや自然、文化、歴史といったようなものを、学校の教育課程の中で、例えば、総合的な学習の時間の中に位置付けていけるのではないかと。そして、地域の方にも一緒に入っていただくことができるのではないかと思う。

現在、本梅こども園と森の自然こども園東本梅で実施されているものを、引き継ぐ形で実施することができれば、その取組は充実したものになる。教育課程そのものが通常の学校と大きく異なるということは、一朝一夕には取り入れられない部分はあるだろうし、誰がどのように指導するのかという難しい部分もあるが、地域と学校が一体となって、地域の良さを活かした学校を作っていくことは、とても良いことだと思う。

委員

私は4月から教育委員に就任させていただいた。これまでの経緯等は直接には携わっていなかったが、義務教育学校になることについては、基本的には賛成

している。地域でも、歓迎されていると聞いている。

一方で、地域や保護者の方の心配はあると思う。丁寧に対応しながら、開校に向けて皆さんと協力していければと考えている。

特色ある学校づくりは大事であるが、私も保護者の 1 人として、一番気になることは、学力である。学力がおろそかになることは良くない。例えば、伊那小学校の「子どもは自ら求め、自ら決め出し、自ら動き出す」といった取組が、学力と直結するような形のカリキュラムを組んでいただけたらというのが保護者としての願いである。

委員

昨年度に、育親中学校、本梅小学校、畑野小学校、青野小学校に行って、現地の活動を見させていただいた。小学校と中学校の連携が進んでいるとお見受けしたので、義務教育学校への移行は、スムーズにいくのではないかなと思う。

通学時間や新しい環境、新しい体制に移行するときの難しい問題は当然あると思うので、しっかり考えていく必要がある。

伊那小学校と高遠小学校への視察についての状況を伺った感想として、周りの小学校は、同じような教育体制をとっているわけではなく、伝統を作り上げてきた小学校独自のものが入っていて、かつ、地域の方の小学校に対する思い入れが強いからうまくいっているのではないかなと思う。そういった面で、そのままの形で持ち込むことは難しい。

その地域で行っていることを、どのようにすれば西部地域で展開できるかということを検討する良い機会になったと思う。

委員

伊那小学校は、長い歴史の中で育まれてきた独自の教育を実践されている。伊那小学校で実践されている内容を、そのまま育親中学校ブロックにおける義務教育学校に取り入れることは難しい。

最近、子どもたちを見ていると、虫を怖がる。子どもたちの普段の生活が、田舎であっても都会と同様の生活に変わってきている印象を受けている。

西部地域には、素晴らしい自然環境がある。自然環境を活かして、生き物について子どもたちが学べるような環境にしてもらいたい。地球環境子ども村で、生き物に関する取組をされているが、このような取組を発展させていくような授業を総合学習で行い、それを発展させて環境問題、生態系について学べればと思う。地域の中で子どもたちを育てていこうという地域性が強い場所であるので、地域の方々が学校教育に協力されると思う。自然の中にあっても意外性のある、これだけは他にないというものがあればと思う。

市長

西部地域の地元の声はどうか

委員

義務教育学校に移行することについては、皆さん喜んでいらっしゃると思う。以前から生徒数が減っているため、育親中学校は南桑中学校と統合されるのではないかという不安があった。協力いただける体制であると思う。

委員

学校視察に行かせていただいた。伊那小学校は、約600人の児童が通学し、施設が充実している学校であった。クラス替えは3年に1回しか行われておらず、3年生と6年生の年度が一つの集大成の年であった。

今回の視察では、3年生の総合学習の授業を見学した。先生は子どもに寄り添い、子どもたちは自分自身が何を学んでいるのかを言葉で説明できていた。

伊那小学校の校長先生の言葉で、子どもたちに対して尊敬の念、畏敬の念を持つ話をされていたことが印象に残っている。子どもたちを信じるということは、紙一重の部分で事故になりかねないこともあるが、そこも託しながら、また先生の探求心と子どもの探求心がぶつかり合い、相乗効果をもたらしていた。先生は、子どもの笑顔が見たいという気持ちが伝わる授業展開をされていた。

高遠小学校では、ふるさとを身近に感じる学校施設や、地域の方の愛に包まれた教育をされていたことが、皆で子どもたちを育てるという部分において、育親中学校ブロックでこれから行おうとしている教育活動に出していけるのではないかと思った。

ゆったりした教育という部分で、3年に1回のクラス替えや先生の異動があまりない部分は、今後、義務教育学校に移行していくときに、子どもたちの形成にも先生たちの育みにも活かしていけるのではないかと感じた。

委員

私も視察に行った。伊那小学校はひとつのブランドである。私が伊那小学校を知ったのは1980年頃である。教科書を使わない学校として、1980年頃に本が発売されたが、その歴史はもっと古い。いわゆる信濃教育は、明治からの長い歴史がある。教科書を使っていない独自の教育活動がブランドになっているが、それを成立させることは簡単なことではない。視察に行ってみてきたものを、そのままやりましょうとなると、それは無理だと思った。

校長先生と話をし、進路や学力のことなど、いろいろな批判があるが、ぶれ

ないとおっしゃっていた。ぶれない力は、歴史と経験の蓄積によるものだと思う。教育の実践の凄みを感じる良い機会であったと思っている。

西部地域の学校をどうしていくかと考えたときに、約30年後に、生徒数は7分の1になる。このまま何もしなかったら、新しい学校を作っても何人の生徒が通うのか。学校のブランド力を高めるためには、他の学校では実施していないことをすることが必要だと考えられる。今回のように視察にバスを貸し切り、いろいろな人たちが見に行くことは、他では、ほとんどやっていない。また、新しい学校づくりを進めるために、複数の検討チームを設置し、いろいろな人が参加するというプロセスは力になる。これをアーカイブでずっと記録していくことも考えられるのではないかな。

学校は誰のものなのか。学校は子どもだけのものではなく、皆で学校をつくっていくことが大事である。

コミュニティ・スクールというキーワードがあるが、コミュニティ・スクールは他でも言っている言葉である。また、自然というものも、どこでも言っている言葉である。あとはデジタルやICTなどを組み合わせながら進めていくしかないのではないかなと思う。

でも、私は、皆で学校をつくっていこうと動いているリアリティは財産であるので、アーカイブに残していくことは良いことだと思う。

もう一つは、先生の人材育成ができる学校になってほしい。教育を支えているのは、現場の先生であり、先生の研鑽の力はすごいと思う。

市長

西部地域の小学校3校、中学校1校との新たな取組について、地域の中には反対する方もおられると思うが、概ね皆さん、新しい学校をつくるというところに賛同し、夢を描いていただいているのだと思う。

今後のタイムスケジュールについて聞かせいただきたい。

教育長

地域に話をした際に、できるだけ早く進めてほしいという声が多かった。子ども的人数的な問題や人材育成という面では、小中学校一貫の良さを早くに経験する中で、共に9年間の実績を上げていき、子どもたちを育てるという、そういったことをできるだけ早くに整えた方が、子どもたちにとっても今後の亀岡市の教育にとってもいいのではないかな。そのためにも、2年後に義務教育学校を開校し、4年後に新たな校舎をつくりたいと考えている。

市長

学校を統合するだけでは意味がない。子どもたちが教育する目標や目的を作っていかなければならない。義務教育学校ということと、それは小中学校一貫だということと合わせて、教育にぜひとも参加したいとか、学んでみたいという人が行けるような学校にしていく必要がある。

今回、伊那小学校に視察に行っていたきたいと言ったのは、学校をきっかけに移住したという方が多いという報告を受けたからである。歴史があって特色がある。

西部地域の持っている宝をどのように磨きながら、どのような形で実現していくかということが大事で、そこに、ならではの教育という部分がつくられるべきである。そうなれば、人口は減っていくかもしれないが、新しい教育に参加したいという人が一定あるのではないか。そういう意味では特認校を含めて位置づけしていく必要があると考えている。

教育委員の皆さんを含めて、地域の皆さんで、これから検討していただくことを初めから否定するつもりはない。自然の豊かさや、人と人との関わりのままとまりの良さということを、どのような形で教育に実現できるかというところを具体的に考えて、形作っていただきたい。

どのような学校にするのか、今までのようなコンクリートの都会的な学校にするのか、内装はすべて木質で整えてほしいとか、例えば、ランチルームを併設するだとか。その他、大ホールがあるだとか、図書館はどうするかとか、議論ができる場を作っていただき、自分たちの地域の学校だという、その思いを形づけられるものに仕上げてほしい。

委員

話を聞きながら、目の前にいろいろな学校の姿が浮かんできた。例えば、活動のできるワークスペースを設けるなら、それだけで教育の中身は変わっていく部分があると思う。教育課程あるいは特色の中で、実際の施設の設備面とリンクさせて考えていくことは大事である。

以前、新聞に、本梅こども園と森の自然こども園東本梅の特色を打ち出したことで、園児数が増えたことが載っていた。大規模の学校に馴染めなかったり、人間関係がうまくいかず不登校になったりしている子も、場が変わると可能性は開かれる。こども園に通っている子やそうした子どもたちの受け入れ先という意味も持たせることができるだろうし、そうすることで子どもの数が減っていくという流れが少し変わってくることも考えられるのではないかな。多面的なところから、教育内容もハード面も併せて考えていくことで、様々な可能性が開かれるものと思う。

委員

本梅こども園と森の自然こども園東本梅も、地元の子どもたちだけだと園児数が少ないが、現在は他の地域から通園する子どもたちで、人数が倍ほどになっている。豊かな自然環境の中で子どもたちは過ごしている。この地域の保育所では以前からその土地の野菜や子ども達が採集した野草を取り入れた給食があり、子どもたちは給食の時間を楽しみにしていた。

義務教育学校でも、自校式給食ができれば、地域で作られた野菜を使った給食などで南丹市や他の地域の子どもたちを呼び込めるのではないかなと思う。

また、西部地域には、元学校の先生等、教育関係の仕事に就いていた方が多い。そういった方に協力いただいて、学校の指導にあたっていただくことも可能ではないか。大規模校になじめない子や不登校の子が豊かな環境の学校であれば登校できるということもある。いろいろな場所から子どもたちが通ってもらえるような魅力ある学校にしていきたい。

市長

意見を拾い集め、意見を出していただく場づくりを進めていく必要がある。新しい学校をつくるということにつなげていくには、手間はかかるが、先ほど話があったようにアーカイブで残しながら、将来、子どもたちにこういう流れの中で、学校ができてきたのだということが、自慢できることにつながっていければと思う。

委員

令和6年4月から義務教育学校として開校し、新しい校舎が令和8年に完成するという説明があった。開校する令和6年までに、どのような学校にしていくかを考えると時間がない。新しい学校のコンセプトをどうするか、検証しながら2～3年の議論が必要であるが、まず、時間が限られているという問題がある。

小学校と中学校の教育課程をつくっていくことは、力のいる作業である。いろいろな方が関わって、多くの意見を出していただくことになる。しかし、意見が出れば出るほど、それを教育課程の中にどのように接合させていくかは、技量が必要になる。やはり、核になるのが学校を背負っていく先生である。実際にそれを作りこむ人である先生を中核に置いた議論の蓄積が必要である。

令和6年4月に開校と考えるのであれば、少しでも早いディスカッションをしていくことが必要である。

市長

先生には異動があり、義務教育学校として開校し、新しい校舎が完成するまで

の4年の間に退職される先生もたくさんいる。その議論をどうしていくかについて、先生へのリサーチも必要であるが、時間に限りがあるため、タイムスケジュールを組んで進めていかなければならないと考えている。

西部地域における将来の教育の在り方を、今時点で議論して、10年、20年先に、あのときの議論があったからこそ、こういう教育が実現できていると言えるような環境づくりに努めていかなければならないと考えているので御協力いただきたい。

場づくりを含めた計画のたたき案を教育委員会で作っていただき、それに基づきながら、教育委員会の中で議論していただくことが大事である。

新しい学校という意味で、これから何に焦点を置くのか。AI時代の社会が来る中で、生きていく力を蓄えることのできる子どもを育てていくことが究極の目的である。

令和6年4月に新しい学校としてスタートしていきたいと考えているので、よろしくお願いします。

(2) 亀岡市立幼稚園の今後の展開について(資料2-1、2-2)

教育長(説明要旨)

近年、亀岡市立幼稚園の園児数は急激に減少しており、平成28年4月1日には112人であったが、令和4年4月1日には61人へと、約46%の減少となった。このことにより懸念していることが、子どもたちが集団で育ち、学ぶメリットが失われつつある状況である。幼児期は、心のはたらきや行動への意欲、事柄への対応や基本的な生活習慣など、人間形成の基礎が培われる大切な時期である。幼児は、身近な環境に主体的に関わり、生活や遊びの中で発達に必要な体験を重ねることによって、社会の一員として生きるための基礎を築いていくことから、集団の中において、多様な人間関係から学び身に着ける「生きる力」は、重要なことであると考えている。

また、施設面においては、この園舎は平成26年に建築された新しく立派な園舎であるが、現在6教室のうち2教室が空き室となっており、施設の有効な活用も課題となっている。

園児数が減少を続ける理由は、近年、保護者、特に女性の就業率が右肩上がりの状況にあることや、令和元年10月から保育料の無償化が始まったことなどから、子どもを早朝から夕方遅くまで預かれる、保育所等のニーズが高まっていることの影響が考えられる。現在、幼稚園の開園時間は午前9時から午後2時まで、その後の預かり保育を含めても午後5時までであるため、フルタイムで就労

される共働き世帯やひとり親の家庭では、幼稚園の幼児教育を子どもに受けさせたいと思っても、朝夕の送迎時間に無理があるため、入園できないという方がいらっしゃる現状もある。

亀岡市立幼稚園は、これまで、唯一の公立幼稚園として、亀岡市内の公立・民間を問わず、保育園や幼稚園、企業主導型保育園など認可外保育施設も含めた幅広い機関を対象として、幼児教育や特別支援教育に関する情報提供や研究会を開催するなど、全体をけん引する「センター的な役割」を担ってきたことや、また、園児に対しては、保護者のみならず教育関係者からも多くの高い評価を得る豊かで質の高い幼児教育を提供してきたと考えている。

それだけに、これまで亀岡市立幼稚園が積み重ね培ってきた、その役割や教育内容について、今後も持続させることの必要性は強く感じている。

このようなことから、現在の幼稚園の良いところはそのままに、さらに教育活動に充てる時間を増やして幼児教育の充実を図るとともに、新たに保護者の就労の有無に関係なく児童に入園いただける体制づくり、また、保育所等への受入枠が確保できず課題となっている待機児童減少にも資するなど、幅広い保護者ニーズや子育て環境の充実にも応えられる園づくりを目指し、認定こども園への移行検討を進めている。

現在の亀岡市立幼稚園に対する御意見として、幼児教育について「特色ある素晴らしい取組ができているが、それを打ち出す弱さがあるように感じる。打ち出し方を見直す必要があるかもしれない。」との声も聞かれることから、「打ち出し方」についても、園の今後の方向性を考えるという視点から、皆さまのお考えやアイデアなどをいただきたい。

市長

市立幼稚園の定数はあるにも関わらず、空きがある。今後の展開として、認定こども園への移行を検討しているという提案であった。

就学前教育について、特徴ある幼児教育を進めていく必要がある。

保育課長

アイシャ・レバインさんは、元亀岡市国際交流員として2002年から2005年までの3年間、亀岡市役所で活動された方である。

現在は、教育系・英会話 YouTuber として活躍されている。令和4年3月には、保育所、こども園、幼稚園の職員に対して、親の立場という視点から子育てについて講演いただいた。今は英語を通じていろいろな情報を発信されている。

市長

亀岡市立幼稚園を、今後、認定こども園に移行していくにあたり、どのような特徴を持たせるかを明確にしていく必要がある。

一つの提案として、アイシャさんを、市立幼稚園のアドバイザー的な位置づけにして、Zoom 等の ICT 環境を整えながら、子どもたちと英語で一緒に遊んでいくような取組ができるのではないかと考えている。

もう一つは、就学前教育として、芸術的な特徴を持たせていければと考えている。英語と芸術というものが、市立幼稚園の今後のあり方として位置づけられたら良いと思う。

市立幼稚園の今後の展望として、認定こども園へ移行し、より多くの子どもたちが登園できるようにしていく。また、特徴のある取組として、英語と芸術的なものを、遊びを通じて学んでいくような取組にできないかと考えている。

市立幼稚園を認定こども園に移行することで何がかわるかという点、一つは給食が必要になるということである。現在、給食の提供について検討している。それを含めて、認定こども園に移行していくことについての御意見をいただきたい。

委員

亀岡市立幼稚園には何度も見学に行かせていただいた。独自の教育をされていて、アートや子どもたちの個性を伸ばす教育をされているのに関心して拝見していた。幼稚園に独特なものがないかということではなく、独自の教育をされていて、子どもたちの人数は減っているが、幼稚園バスも給食もないという状況でこれだけの人数が集まっているのはすばらしいことだと思う。

私が子どもを保育所に通わせていた当時は、路線バスを利用した通園バスも給食もあった。仕事をしている親からすると長時間預かってもらえるというメリットは大きかった。

亀岡市立幼稚園については、短い保育時間数で、自分で送迎もしないといけない。給食もないので、自分でお弁当を作らないといけない。その中でこれだけの園児を集めているということは、この幼稚園に魅力があるからだと思う。今後、認定こども園に移行して、給食があり、預けられる時間が増えると、園児も増えていくと思う。園の魅力を広報し、よく知ってもらい、実際に見ていただくと良さがすぐ分かると思う。

市長

行政として、保育所へ入れない待機児童がいる中で、せっかくこれだけの施設があって、空き教室があるのはもったいないので有効活用しないといけない。アートは元々力を入れているので強化していけば、良い場所に立地しているので、

人気が出て園児数は増えるのではないかと思う。

委員

市立幼稚園には、何度も足を運んでいる。魅力的である。物語性が高いという意味ではアーティスティックだという感じはある。

今後、西部地域の児童数が減っていく。市内の待機児童がある中で、認定こども園に移行することは必要である。

2歳児の受け入れをどうするか。3歳児から受け入れると、なかなか人が集められないが、2歳児を受け入れるとなると給食をどうするのか、設備をどうするのかといった問題が出てくる。満3歳になっているのであれば、デリバリーを利用することも可能で、デリバリーを使用しながら段階的に園で調理を行っていくという形に進めていくことも考えられる。

また、2歳児の受け入れについては、当然、民間の保育園等があるため、民業圧迫という部分で、しっかりと説明をしていかなければならない。

また、時間の問題がある。亀岡市立幼稚園の良さは、物語を皆でつくれていることである。物語を作るためには、職員がディスカッションしているはずであるが、例えば、1日11時間の開園時間になると当然シフト制になるため、そこをどうしていくか。職員の勤務がシフト制になり、物語がだんだんと色あせていくと、とても残念だと思う。認定こども園への移行は必須であるが、移行するにおいて、考えていかなければならないことがある。今の段階の議論としては、枠組みをどのように考えていくのか、そして、認定こども園に移行する場合、幼稚園型認定こども園にするのか、幼保連携型認定こども園にするのかによって、所管も変わる。

亀岡市立幼稚園が、認定こども園に移行すると業務が増え、職員が足りなくなる。幼児教育総合センターにも人が足りない。センターに専属の職員を配置し、センターの機能強化を図るとともに、幼少連携と福祉教育の連携が必要になってくると思う。

まずは、認定こども園をどのような構造にしていこうのかという議論が優先する。中身の議論は次に考えていくことだと思う。

市長

議論が始まったところである。具体的にタイムスケジュールが決まっているわけではない。今日は、皆さんからお話を伺う中で、認定こども園への移行に対しての御理解がいただけるならそれを前提としたタイムスケジュールの検討を含めた取組を進めていきたい。

委員

今の亀岡市立幼稚園ができる前の市立幼稚園を一つの市立幼稚園に統合する際に、「亀岡市就学前教育の推進に係る公立幼稚園のあり方を考える懇話会」の委員をさせていただいた。懇話会では、3歳児保育をスタートさせていくこと、そして幼児教育総合センターとしての機能を持たせていくという案が取りまとめられて、今の市立幼稚園が誕生したと記憶している。

市立幼稚園の現在までの保育、教育の内容は、質の高いものを提供されている。先生方も熱心に取り組まれている。

また、幼稚園は1園しかないため、保育所と連携して一緒に研修会や交流会を実施されている。これは先進的なことである。

認定こども園への移行については、幼稚園の存続に関わることであり、進めていくべき必要があると思う。認定こども園に移行する中で、市立の幼稚園を基本とするいわゆる幼稚園型の認定こども園としての役割について考えていく必要がある。

そこで、幼児教育総合センターの役割をどのように果たしていくか。国や府でも幼児教育の重要性が強調されている。例えば就学前のさまざまな子どもたちの発達上の悩みや課題への対応は、現実としては小学校の通級指導教室、あるいは、市教育委員会で、特別支援教育を担っているという実態があるため、そういったあたりを整理して、子どもたちの発達を全面的に支援していくための認定こども園を考えていく必要がある。

委員

認定こども園に移行した本梅こども園や森の自然こども園東本梅の状況をデータで見ると、保護者のニーズが認定こども園の方に来ていることが明らかである。認定こども園に移行するということは必然的な流れだと思う。

市長

何名かの方に御意見いただいたように、認定こども園への移行については、進めていくべきだという御意見であった。

今後は、認定こども園への移行に向けての課題は何なのか、そしてメリット、デメリット、タイムスケジュールを含めて検討していきたいと考えているので、よろしくお願いします。

(3) 亀岡市立図書館中央館リニューアルについて(資料3)

教育長（説明要旨）

亀岡市立図書館中央館は、昭和55年の開館から40年以上が経過し、この間に、施設の老朽化が進むとともに、図書増加により閲覧スペースが手狭となってきた。市民の利便性をさらに向上させるため、施設や備品などの更新とともに、図書館内の空間の有効活用などの課題を抱えている。

また一方で、市の中心部に位置する中央館は、第2駐車場も新たにでき、慢性的な駐車場不足も解消され、市内最大の蔵書を有する「センター図書館」でもある。今後、人生100年時代に市民に愛され、必要とされる図書館として、その魅力をさらに高めていくことが期待されている。

総合計画や今年度から実施の教育振興基本計画においても、人生100年時代には、図書館の役割は、生涯学習都市・亀岡において、学びや文化の拠点としても、ますます重要となっている。

現在、プロポーザル方式によるコンサルティング・設計業務の事業者選定を進めている。誰もが気楽に訪れて本と出会える「楽しめる図書館」、環境先進都市、SDGs 未来都市、ウッドスタート宣言都市など、市のさまざまな施策を何らかの形で反映できるような図書館を目指すなど、「一定の基本線を踏まえた提案」を受けようとしている。

特に3階のテラスなど、これまで活用してこなかったスペースの有効活用、各階を通じ、レイアウトの見直しによる、誰もが快適に利用できる空間づくりなど、今まで中央館で着手してこなかったことにも踏み込んで、リニューアルを進め、来年度に工事に着工する予定である。

リニューアル工事のときには、できるだけ図書館機能を維持し、また蔵書の見直し作業を行うとともに、スマートフォンなどデジタルの世界からの玄関口であるホームページの改善作業などを行う。

2階の児童コーナーについては、現在、児童図書を市内の他館より充実しているが、親子で訪れて、子どもたちが読書に興味と関心を高め、自ら紙の本をめくって学ぶことの楽しさを味わえるコーナーとして、さらによくしていきたいと考えている。

委員の皆様には、この児童コーナーを学校図書館とも異なる、ユニークなゾーンに作り上げるための御提案をいただければと考えている。

児童がリアルな本との出会い、そして紙の本をめくりながら、絵柄や活字を見ることが通じて、次の展開を想像して楽しみ、広い視点で、物事を深くしっかりと見つめ、「自立した若者に成長していく学びの場」とするには、このフロアの改善案、デジタルとアナログの融合についてや、どんな図書が必要なのかなど、具体的なアイデアをいただきたいと考えている。

未来を担う子どもたちが、本との出会い、読書を通じて、豊かな人間性を身に

つけ成長する、そうした図書館になるようにリニューアルしていきたい。

市長

A I が高齢化社会の中で図書館がキーワードになってくると示していることがテレビで放映されていた。亀岡の図書館はどうだろうと考えたときに、ガレリアかめおかの図書館は20数年経っており、リニューアルしなければならないが、一番に中央館をリニューアルしたい。どういう図書館にすればよいかを含めて、御意見をいただきたい。

委員

図書館については、改装いただけるということでありがたい。協議事項2の「亀岡市立幼稚園の今後の展望」で、市長から芸術という話があり、いいなと思った。図書館についても、芸術家の方に入ってください、本に出会えるだけの場所ではなくて、文化ということでいろいろなアートに触れられる場所にしていただきたい。芸術は、触れるだけで人生豊かに感じることもある。アートに触れられる場所にしてほしい。

市長

芸術というものが感じられる場所にするということは良いことだと思っている。

委員

こういった場所であれば、子どもを連れて行こうと思えるだろうかと考えたときに、プロジェクターを使って読み聞かせの映像が見られるスペースがあれば、子どもたちは、こういう本もあるのだということに出会いやすいと思う。また、大人にとっては、自然やモダンアート等、写真を撮るときに映える背景があれば、施設としての値打ちが上がり、一つの観光スポットとなって、市民が利用する際のプラスアルファになるのではないかと感じた。

市長

そういう面では、市民が行きたくなるような図書館をどう作り上げていくか、これは大事な要素である。

委員

私も図書館の環境を整えることは大事なことだと思い、改めて図書館へ行ってきた。日曜日であったが、残念ながら市民の方は多くなかった。私が思ったこ

とは、雑誌や新聞を読むコーナーと、蔵書検索の場所が分離しているため、動線がつながっていただいていたらいいと思った。また、郷土資料のコーナーが2階の児童書と一緒にあるため、1階に移動させるなどして切り離すか、もしくは、文化資料館の亀岡市史等の資料と一緒にして、施設を分けずに一体化した方がいいのではないかと考えた。全体としては、動きやすい動線と明るい印象が必要であると思った。

日本経済新聞に「時代を映す図書館建築」として連載されていた、人口約20万人の都市である太田市の太田市美術館・図書館は、自然に歩いていると、いろいろな本と出会えて、カフェもある図書館である。

また、佐賀県の武雄市は、人口4万人ほどの都市であるが、武雄市図書館には、蔦屋書店やスターバックスコーヒーを併設し、市外からも人が押し寄せていく図書館である。

今回のリニューアルでは無理だと思うが、できれば文化資料館と図書館と劇場等、いろいろな要素を取り入れた文化施設が実現することを夢見ている。

委員

図書館には、居心地の良さが求められる。今回のリニューアルは嬉しいことである。図書館ホームページで、書籍の検索方法を見ると、昔からほとんど変わっていなかったが、今回のリニューアルで、そのデジタル的な部分を更新されることには期待している。

また、図書館に求められるものは、蔵書数であると思う。亀岡市立図書館で読みたい本を探してみても、1冊しかなく、もう既に他の方が借りられていて、順番待ちが10人くらいあって、これはもう断念しようということが多々ある。そのため、人気の高い書籍の蔵書数を増やしていただくことと、古いものをできるだけ整理していただいて、新しい本を入れていただく、そういったことをお願いしたい。

市長

7月にプロポーザル方式により、コンサルティング業務委託事業者を決定する予定であるが、いくつかの設計事業者が手を挙げていただいている。

より明るくて、居心地がいい、そこで1日でも本を読んでいたと思えるような図書館の実現に向けて、教育委員会で取組を進めていただきたい。

今年度中に設計をして、来年度当初予算で予算化をし、整備を行い、令和6年度にはオープンできるのではないかと考えている。

(4)「デジタル文化資料館(仮称)」構築事業について(資料4-1、4-2)

教育長(説明要旨)

国のデジタル田園都市国家構想推進交付金を活用して、亀岡市文化資料館の所有する文化財をはじめ市内各地域の伝統芸能や祭事、風習、自然等の歴史・文化資源をデジタルデータとして保存・活用する「(仮称) 亀岡市デジタル文化資料館」を構築する。そのデジタル文化資料館を、歴史・文化コンテンツを核としてつつ多様な仮想空間サービス、いわゆるメタバースを提供するプラットフォームとして構成し、亀岡市のシティ・プロモーションや観光振興、ふるさと学習などに多面的に活用することにより、文化振興やシビックプライド醸成はもとより、地域経済の活性化や移住定住の促進を通じた亀岡市の新たな発展につなげることを目的としている。

そもそもこの交付金の申請に至った経過は、亀岡市において文化財所有者の高齢化が問題視され、文化資料館に文化財保護が難しいという訴えかけが多くなってきたことを受け、手入れが行き届かず、文化財が滅失することを防ぐため、高精細画像で撮影し、デジタルコンテンツとして保存し、後世に残していくためである。

その事業内容として、一つ目は、デジタル文化資料館の構築に必要なデジタルコンテンツとして、主要項目と今後事業展開していくコンテンツの作成を行う。

まず、主要項目として、亀岡の歴史・文化資源の活用である。本市が所有・管理する文化財をデジタルデータ化し仮想空間(メタバース)内でそれらの展示を観覧・体験できるコンテンツを作成する。例として、明智光秀による本能寺の変にまつわる歴史資料を高精細撮影して分かりやすく解説することや円山応挙の芸術、石田梅岩にまつわる史料その他亀岡の歴史・文化などを学び・体験できるコンテンツを作成する予定である。

主要項目以外の今後の展開として、「SDGs 未来都市・亀岡の取組」、「亀岡への移住ガイド」、「亀岡観光体験」、「亀岡 e モール(e サイト)」、「企画展等の開催」等があり今年度以降展開していきたいと考えている。

二つ目は、デジタルラボ等の整備である。多様な文化資源等をもとにデジタルデータを制作するとともに、デジタル文化資料館と連携する拠点となる収蔵スペース及び機材を整備する施設の建設である。

文化財等の撮影・録画等やデジタルコンテンツ制作が主になっており、撮影しました文化財などを保管する収蔵スペースも建設する。

三つ目は、いわゆるソフト・ハードそれらに係る「事業費及び財源内訳」である。

全体計画2億円の事業である。財源としてデジタル田園都市国家構想推進交

付金で2分の1の1億円、そして新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金で2分の1の1億円である。

四つ目は、「運営体制及び運営コスト」についてであるが、これらの事業については、単年度の予算ではあるが、これからの複数年の運営が必要となってくる。

事業者については、公募プロポーザルにおいて、デジタル文化資料館やデジタルラボの運営に関連して「収益性の確保の仕組み」「運営体制」「収支計画」についても効率的な運営体制を構築するよう提案を求め、外部に業務委託で運営する予定としている。

亀岡市デジタル文化資料館の整備事業のイメージとしては、まず一番下の土台となる部分が、実物の展示である。これらは、文化資料館にあるリアルな文化財にあたる。

そして、その上に、インターネット上にある仮想空間内のプラットフォームであるメタバースがあり、その中にデジタル文化資料館の核となるメインコンテンツがあり、そのまわりにあるSDGs未来都市・霧の芸術祭・移住ガイド紹介・観光案内・特産品のeバザールなどを拡張していきたいと思っている。

ハード事業となるデジタルラボは、デジタルコンテンツ制作の拠点となり、それら文化財の保存管理ができる収蔵スペースである。

このように実物の展示を基本としながら、それらを市内外の皆さんに見てもらうメタバースの構築を目指している。

このように文化財保護を事業のスタートとしているが、昨年10月に亀岡市デジタルファースト宣言を表明した亀岡市として、時代を先取りした事業であると考えている。

人と時代に選ばれるリーディングシティ亀岡としてデジタル化に向けて取り組んでいきたいと考えている。

市長

文化資料館については、新文化資料館構想の中で議論をしていただき、特に、文化施設としての文化ホールと文化資料館については、これから小委員会でのような機能が必要かということを明確にし、今年度中に方向性を出す予定である。

今回は2億円という大きな予算であり、新たな取組として進めていく。

委員

今後の展開としてはとても良い。私たちの研究所は、人間文化研究機構に属していて、今年度から始まった計画では、デジタル・ヒューマニティーズに特化していて、いろいろな実物の博物館とオンライン上でアクセスできるものをバー

チャルで作ろうということが全体計画の中にある。

完全にメタバースでなくても、例えば障害のある方に、実物展示は見る事ができないが、それをどうやって感覚としてつかんでもらうかということなどの例もあり、オンライン上での話と実際にリアルをどうやって伝えるか、ということは非常に重要なことだと思う。そういったことを含めた、新たな展開ができるのだと面白く思っている。

具体的に、どの程度の資料をどのようにデジタル化して、オンライン上でアプローチできるのかということについて、計画ができたら聞きたい。

市長

それぞれ方向性が定まっていくときに、御説明させていただく予定である。

運営拠点については、みらい教育リサーチセンターに拠点を置いて、そこにハードの機器を設置する予定である。みらい教育リサーチセンターでの今の子どもたちへの ICT 教育にも活用できる施設ができるのではないかと期待している。

新たな資料館ができたときには、そことどう連携するかということがあるかと思うが、今の段階では、まだ資料館は具体的に動いていないため、決まった段階で調整していきたい。

委員

今回のこの事業を聞いたときに、金額が大きく、しかも単年度での実施であるため、次年度以降のランニングコストをどのように考えるかがポイントだと感じた。

もちろん、デジタルコンテンツ自体は、財産になる部分であるため、いろいろな形で活用できると思う。このメタバースの部分は、不安定な要素があるので、無駄になっていく部分が出てくるかもしれないというリスクがあるような気がする。そのあたりを十分に考えながら、次年度以降に活用していくことがポイントだと思う。

市長

専門家が必要になってくると考えている。また、今年1年で全てのデータを取り込むことはできない。方向性と環境を整えながら、できた段階で順番にデータを保存し、活用していける環境に作り上げていきたい。初期投資やランニングコストもかかってくる。亀岡市は財政が厳しい中ではあるが、昨年度のふるさと納税で約31億円の寄付をいただき、今年度は35億円を目指して進めている。達成できれば、教育・文化に拠出できる財源を確保できるのではないかと考えている。これについては未知数の部分があるため、その時々には教育委員会に報告させ

ていただくことになるので、よろしくお願いします。

本日は4つの事項について御説明し、情報共有した。西部地域における新たな学校づくりについての方向性については、この総合教育会議で意識統一ができ、大変うれしく思う。また、亀岡市立幼稚園の認定こども園への移行についても意識統一ができた。このようなことを着実に進めていきながら亀岡市の教育環境を整えていければと考えているのでよろしくお願いいたします。

4 教育長あいさつ

5 閉会